

校長室からのお知らせ

2月10日号 NO.26

岸和田市立山直北小学校
校長 尾野武志

プレッシャー

世の中には、プレッシャーに強いと言われる人がいます。有名なところでは、プロ野球で活躍した長嶋茂雄さんが挙げられると思います。

長嶋さんは「なぜ、チャンスやプレッシャーに強いのか？」と人から聞かれたときに「私はプレッシャーに感謝している。だからプレッシャーに強い。」と答えたそうです。「プレッシャーに感謝している。」とは、長嶋さんらしい名言だと思いますが、その裏には、「プレッシャーを克服するには、どんな相手、どんな状況にも負けない自信を持った自分を作っておく。それには、練習しかありません。」という考えや「自分より練習している人はいない。だからプレッシャーも怖くない。」という思いがあったそうです。

さて、私ですが、かなりプレッシャーに弱いと自覚があります。バリエードのような体格のくせして、意外にデリケートと家族から嘲笑されています。

実は、下記の「プレッシャー傾向診断」を試したところ、「あなたはプレッシャーにかなり弱い傾向があります（一番弱いレベル）」と診断され、さらに「本番に弱い」や「逃げ癖がついている」や「ストレスから心身の不調につながりやすい」など余計な追い打ちもあり、かなり落ち込みました。

みなさまのお子さまは、プレッシャーに打ち勝てそうでしょうか。もし、下記の診断であてはまる項目が多くても、ご家族がしっかり話を聞いてあげたり励ましてあげたりすることで、プレッシャーに強くなれるそうです。

科学的根拠は少ないのですが、「プレッシャーに弱い人は頭がいい（私を除きます）」との噂もあります。お子さまを信じてあげましょう。

- ① 自分に自信がない
- ② ネガティブな結果を予測する
- ③ 失敗することは恥ずかしいと思う
- ④ 周りの目を気にする
- ⑤ 悩みを一人で抱えることが多い
- ⑥ 感情のコントロールが難しい
- ⑦ プレッシャーで眠れなくなる
- ⑧ 緊張でしばしば体や口が堅くなる

校長室からのお知らせ

2月20日号 NO.27

岸和田市立山直北小学校
校長 尾野武志

【ヤバい】は【ヤバい】です

先日、「今の子どもたちは、語彙力が低下し、言葉のやり取りができなくなってきている。気持ちや感情を上手に伝えることができなくなり、【ヤバい】や【マズい】で会話が終わる。そのため、子どもたちが傷つけ合うことになっているのではないか。」とのお話を聞く機会があり、深く印象に残りました。

もともと【ヤバい】は、「不都合であったり危険であったりすること」を意味していたと思いますが、2000年頃から「肯定的であったりとてもよい状態であったりすること」の意味でも使われるようになったそうです。

「校長先生、これってヤバくないですか？」と聞かれることがあり、きちんと確認もせずに適当に話を合わせていますが、よくよく考えると【ヤバい】は、万能表現のような気がします。

A「ヤバい。財布、忘れた。」B「睡眠不足やわ。眠たすぎてヤバい。」C「嘘がばれたみたい。かなりヤバいわ。」D「あの歌はいつ聞いても泣けてきてヤバいわ。」E「俳優の〇〇って、スタイルがよくてヤバいよね。」F「このラーメン、ヤバいよね。」などは、それぞれが違った意味での使われ方になっていると思います。Aは「動揺」、Bは「つらい」、Cは「気まずい」、Dは「感動」、Eは「格好いい」、Fは「おいしい」などの感情を伝えているのだと思いますが、もしかするとまったく反対の意味かもしれません。Fは、「おいしくない」と感じて使える表現であると思います。

表現は同じであっても、まったく逆の感情を抱いていると意思の疎通は難しく、分かり合うではなく傷つけ合う関係になる可能性があります。

また、【ヤバい】で済ますことが増えていくと、日本語特有のそのときどきの心情を微妙に言い表す様々な美しい表現を知らずに大人になってしまう危険性もあると考えます。

私たち大人が、場や状況に応じた適切な言葉や表現をたくさん子どもたちにシャワーのように浴びせることで、子どもたちの語彙力を向上させ、子どもたちが互いの気持ちや感情を共感できれるようにしたいと願います。まずは、職員室内【ヤバい】撲滅作戦に取り組みたいと思っています。